



Title	<翻訳>ネパールのイスラム教徒たち
Author(s)	Sharma, Sudhindra; 山本, 真弓
Citation	大阪外国語大学アジア太平洋論叢. 1997, 7, p. 149-166
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99750
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ネパールのイスラム教徒たち

原題：How the Crescent Fares in Nepal

『ヒマール』誌第7巻第6号、1994年11・12月

スデインドラ・シャルマ*

(Sudhindra Sharma)

山本真弓 訳・解説**

ムアッジンが信者に礼拝を呼びかける回数寺院の尖塔は、その隣にあるガンタ・ガル（時計塔）や少し離れたところにあるナラヤン・ロイヤル・パレスの塔とその高さを競いあっているかのようだ。金曜日。信者はカトマンズの隅々から金曜日の祈りを捧げにネパール・ジャマ・マスジッドに集まる。その群れはカトマンズの華やかな一角ダルバール・マルグ・プラザから次々と出てくる車の群れを覆い隠してしまうほどだ。

その光景は、それ自体、特別なことではない。ムアッジンは長い間この地点からの呼び掛けを続けてきた。おそらく、17世紀初頭、プラターピ・マッラ王の統治時代から。過去1年ほどの間に変わったことといえば、質素な歴史的建造物が壊されて、石油マネーを資金源に建てられた新しい威勢のよい建築物が、前の何倍もの大きさでこの地に現われたことであろう。このあいだ、礼拝にやって来たイスラム教徒は、過去10年の10倍以上にものぼる。

ネパールというヒンドゥー国家内にコミュニナルな陰謀を探し求める者たちには、ダルバール・マルグの金曜日の人混みは、ムサルマーンの力がこの王国で強まりつつあるという十分明白な証拠であるように思われるだろう。アヨーディアの悲劇とボンベイの爆破事件の余波として、地政学的な陰謀を掘り出そうとするイン

* 社会学者、インターディシプリンアリー・アナリスト所属

**山口大学人文学部、駐ネパール日本大使館専門調査員

ドのメディアの人びとにとっては、都心部の往来を堂々とムスリムたちが行き来することは、悪名高いパキスタン秘密警察 ISI がネパールで何か汚らわしいことをしようとしている十分な証拠である。実際、インドのジャーナリストや有識者たちはこの数か月にわたって、パキスタンがネパールのムスリムを隠れ蓑に使ってインドを攻撃するという凄まじい警告を発しているのだ。

ネパールのイスラム教徒がニュースになったのは歴史上これが初めてであるが、こういったニュースはなかったほうがよかった。ごく小さなマイノリティーとして、ムスリムたちは目立たないことをむしろ好んできたり、ほとんど波風も立てていない。ここ数か月のあいだに、表舞台に「立たされる」ことになったため、ネパールの他のコミュニティに関する詳細な社会科学的調査と著述に比べてほとんど何も書かれてこなかったこのコミュニティは、悪評という見当違いの場所に置かれることとなった。トリプバン大学の政治学者は、「インドのメディアが流すネパーリー・ムスリムに関するあまりにも単純化した報道は、単にムスリム当人にとって不愉快なだけでなく、ネパールにとっても政治的に危険なものであり、これに対抗する唯一の方法は、このコミュニティについて正確に描写し、彼らを人間として見ることである。」と語る。

彼のような政治学者その他が強く思うのは、南アジアでエスカレートしているヒンドゥーとムスリムのあいだの敵対心が国境の北に持ち込まれないことが重要だということである。さらに言えば、アヨーディア以降の暴力沙汰がネパールの領土内に詰め込まれなかつたという事実が示すものは、ネパールとインドのあいだのオープン・ボーダーがその他の点ではともかく、原理主義と狂信主義の直接の持込みを妨げるような社会政治的障壁として有効に機能したということである。どうやら、ネパールは別の国家であるということが重要であるらしい。

ヒンドゥー国家はムスリム・マイノリティーの人びとに自らの宗教を信仰する権利を認めると同時に、他人を改宗させることは禁止してきた。歴史的に、そして今日に至るまで、ムスリムたちは大筋においてこの制約に従ってきたし、ネパール社会が封建時代からパンチャーヤト時代を経て、今日の民主主義に移行したときにも、南アジアのどの地域よりもヒンドゥー・ムスリム関係を友好的なものとしている。

しかしながら、この問題について、国家として平然と構えていてよい理由はあまりない。というのも、インド亜大陸で学ぶ、あるいは西アジアで働くネパーリー・ムスリムたちは、多くの人びとが「正しい」イスラムだと考えるものに身を曝しつつあり、そして、彼らの確固たる見解をはっきりと表現し始めているからである。湾岸諸国の布教を意図する寄贈者たちが学校や組織や個々人に資金供与することにより、ネパールはますます平然とは澄ましていられなくなった。

これらすべてに加えて、ネパールのヒンドゥー知識人層が、口では反インドを語っているにもかかわらず、もっぱらインドの政治家、学者、ジャーナリストたちの著作を読んで育ったというのも事実である。インドのメディアの影響と、潜在的に受け継いでいるにもかかわらず今なおはっきりと形にはなっていない反ムスリムの偏見が一緒になって、少数派ムスリムに対する知識人層の態度を硬化させることもありうるだろう。また、パキスタンがネパールの南のオープン・ボーダーを通じてインドを解体しようとしていると信じて疑わないインドの政治家や官僚たちの激しい怒りからネパールを守らねばならないと認識されるとき、こういった知識人層の態度が強化されることもまた、ありうるのだ。

イスラム教徒と遅参者

ネパールのムスリムたちは主にスンニ派ムスリムであるとはいえ、均質な集団を構成しているわけではない。彼らの祖先は、様々な時代に南アジアの異なる地域とチベットからネパールへやってきて、以来、圧倒的にヒンドゥーが多数を占めるなかで平和に暮らしてきた。

ヴァンクシャヴァリによると、カシミールのムスリムたちはラトナ・マッラ王の統治時代（1484-1520）にカトマンズにやってきた。彼らはカシミーリー・タキアというモスクを建て、様々な職業に従事した。たとえば、デリー・スルタナと通信する書記や香り職人や楽士やバンガル売人などである。なかには、マッラ宮殿の大臣に任命された者も若干いるし、チベット交易に従事した者も数多い。このような移住者の子孫が現在カトマンズに住んでいて、およそ2千人を数える。彼らは一般に教育程度が高く、家庭内においてもカシミール語よりはネパール語

とウルドゥー語を混ぜて話すことが多い。小商人として働く者が多い一方、公務員になったり政治家になった者も若干いる。

カトマンズ盆地に入ってきたムスリムの第二のグループは、ヒンドゥスタニー起源の者たちだ。プラタープ・マッラの統治期にやってきた彼らはカシミーリー・タキアの所有地の南の部分に別のモスクを建てることを許された。現在、ネパリー・ジャマ・マスジッドとして知られているこのヒンドゥスタニー・モスクは、その起源がシーア派モスク、つまりイマムバラ（宗教施設）だったと言われている。このモスクはマウラナ・サルガラ・アリ・シャーによってスンニ派のモスクに改宗された。マウラナとは、1857年のセポイの反乱がイギリスによって鎮圧されたのち、ラクノーのベイガム・ハズラト・マハルが避難地を求めてカトマンズにやってきたとき、彼女の側近とともにやってきたムガル帝国最後の皇帝バハドゥル・シャー・ザファルのムフティ（教令発行者）である。

ネパールに居を定めたムスリムたちの第三のグループは、16世紀から17世紀にかけて北インドの様々な地域から、高地の支配者たちによって軍事用武器製造（大砲を含む）のために招かれて来た者たちである。彼らはその後も農具や家庭用品や装飾品を作る者として高地に留まった。これらの移住者の子孫は、チュロウテあるいは、バンガル売人として知られているが、圧倒的多数は農民になっている。これら高地ムスリムはネパールの中央およびゴルカの西のディストリクト、タナフ、カスキ、シャングジャ、バルバ、アルガカンチ、ピュータン、ダイレーグなど極めて広範囲に散らばって住んでいる。

チベット起源のムスリム移民たちにはラダック出身の者も入るし、チベットそのものから来たものもいる。後者はそのほとんどが1959年の中華人民共和国によるチベット併合の後に来た者で、これらチベット・ムスリムたちはことばも衣服も、チベット仏教徒たちと区別がつかない。今日、多くの人々が中国の耐久消費財の交易や骨董品の売買に従事している。全体として、このグループは他のムスリム・コミュニティーよりは経済的に豊かである。

小さなグループが多様性に富む一方で、イスラム信奉者の最大コミュニティー（90%以上）はタライのムスリムたちである。バンケ、カピラバストゥ、ルパンデヒ、バルサ、バラ、ラウタハットといったタライのディストリクトに集中して

いるタライ・ムスリムたちのうち、ネパール統一時にすでにここにいたものも若干いるが、その他は19世紀以降、賃金労働者としてイギリス領インドから移住してきた。ほとんどが小地主だが、依然として小作人および農業労働者として働いているものも相当数いる。家庭内では彼らはウルドゥー語ではなく、地域のことば、すなわち西タライではアワディ語を、東タライではポジプリ語を話している。

チュロウテ高地ムスリムは高地のヒンドゥー的環境に非常に影響されてきた。彼らは割礼をするし、死体を埋葬しもするが、他方でニカーやザカートのような他の慣習もばらばらに行っている。一日5回の礼拝とラマダンのあいだの一ヶ月におよぶ断食は、行われなくとも気にしない。チュロウテはカトマンズのカシミーリー・ムスリムと同様、ネパール語を話すが、ネワール語に長けている者も数多い。カシミーリー・ムスリムの生活様式が都市のアッパー・ミドルのヒンドゥーのそれと似通っているのに対して、チュロウテはファッショングや食習慣その他の慣習において、バフン・チェットリと区別がつかない。

長年のあいだネパールに住み、共通の歴史的経験を分かち合いながら、前述のグループはネパールという国家に対する強い一体感を育ててきた。他方、タライ・ムスリムたちは他のタライのコミュニティー同様、国境を越えた結びつきを強力に持ち続けており、ウッタル・プラデーシュ州やビハール州のより多くのムスリム人口から文化的な支持を受け続けている。しかし、高地ムスリムとタライ・ムスリムとのあいだに広がる溝が深くとも、その溝のいくらかは教育を受けたタライ・ムスリムがカトマンズのカシミーリー・ムスリムと結婚することによって埋められつつあるし、タライのモールヴィ（イスラム法学者）は高地のマドラッサ（イスラム学院）を熱心に訪れている。

この他にもふたつのムスリムのグループがある。ひとつは、1971年にバングラデシュから難民としてやって来た者たちで、そのほとんどはパキスタンに送還されている。もうひとつのグループはカシミールの商人たちで、彼らが初めてやって来たのは1970年代であった。彼らはカトマンズの旅行者地区で骨董品店を開いた。その後、1990年にジャンムー・カシミールでエスカレートした政治的混乱以来、スリナガルから次々と入ってきた。多くの店主たちは、手工芸品や敷物、毛皮製品をもってやってきた。

これら、最近のムスリム移民たちは、古くからのムスリムたちとほとんど、あるいは全く繋がりをもっておらず、カトマンズに古くからカシミーリー・ムスリムという民族がいることすら知らない者が多数である。インドのメディアは最近移住してきたこれらのグループにもっぱら注意を向けている。というのは、彼らはパキスタンに支持されたカシミール盆地出身の軍隊に隠れ蓑を提供することができるからである。チエットラパティの旅行者地区に骨董品を構えるモハンマド・アジズは「僕らには他のムスリムと同盟しようなんて気はさらさらないさ。もっぱら自分たちの商売に忙しいし、政治にかまける暇なんてないよ。インシャッラー、カシミール情勢がよくなったら、戻るさ。」と言う。

数の政治

歴史的に見て、ヒンドゥー国家はムスリム・マイノリティーにイスラム教の教義を行う自由を認めていたが、数々の制約をも課してきた。たとえば、モスクやマドラッサあるいは共同墓地を建設するための土地を提供する一方、改宗と牛の屠殺を禁止してきたのである。

1854年の旧法典 (Mulki Ain Civil Code) は儀礼的な淨・不淨の観念に基づくひとつの階層制度の下にこの国のすべてのコミュニティーを位置づけた。ムスリムはこの過程で、この階層制度の最下層に置かれることになった。クリスチャンについては、油搾り人や屠殺人や洗濯夫と同じカテゴリー、すなわち不淨だが不可触民ではないという地位が与えられた。1964年の新法典の施行によってカースト制度の法的根拠は失われた。

1991年センサスによるとネパールの人口 1 千850万人のうち65万人、全体の3.6 %がムスリムだ。1954年には2.6%、1971年には 3 %だった。このように徐々に増えているのは比較的出生率が高いことによる自然増とされる。イスラム教への改宗者の数は、統計的に無視しうるものであり、インドからの絶え間ない移民という現象もない。(ムスリム人口の増加率が緩慢であるのに対して、1971年までは数のうえでは重要でなかったキリスト教徒の数は1981年の4000人から1991年の3万1千人へと劇的に増加している。このような増加は改宗によってしか説明し

えない。)

ネパールのムスリムは、南アジアの他の地域のムスリムのように決して土地持ちの上流階級を構成してはいない。ムスリムが保有する土地の平均は高地では0.86ヘクタールで、平地では1.23ヘクタールである。多くのタライ・ムスリムは小作人か農業労働者だ。

社会的法的ハンディ故に、ムスリムは行政に十分な数の代表を送っていないし、貿易や産業に従事する者も数少ない。もっとも今や、政界では、以前より強く声を反映させている。1981年の国家パンチャーヤトには3人のムスリム代表がいたのに対して、1990年選挙では5人のムスリムが下院議員に選ばれた。1994年11月15日の選挙では、下院に3人を送り込んだにすぎず敗退しているが、おそらくこれは一時的なものであろう。

身の安全に対する懸念

ネパリー・ムスリムたちは、政治的代表や経済的豊かさにおいては、近隣諸国のムスリムたちに遅れをとっているようだが、彼らのあいだでは、ここは安全だ、という思いが強い。そのライフ・スタイルが信仰や文化の点で国境を越えた同じ信仰を持つ者たちと似ている一方、自分たちの方がインドに住んでいるムスリムたちよりもはるかに安全であるという安心感をひとりひとりがもっている。オープン・ボーダーを飛び越えて容易にネパールにまで入って来ても不思議はないビハール州やウッタル・プラデーシュ州でのコミュニナル暴動は、今のところ、ネパールでは起こっていない。

ネパール・タライではヒンドゥーとムスリムの剥き出しの対立は少ししかなかった。故マヘンドラ国王によって任命されたコミュニナル問題を解決するための委員会である全ネパール・アンジュマン・イスラハ (All Nepal Anjuman Islaha) によると、1954年から1977年までのあいだに12のコミュニナル暴動が記録されている。これらの暴動はほとんどの場合、牛の屠殺やタジアのような宗教行列やモスクの建設の申し立てによって引き起こされてきた。もっとも深刻なコミュニナル暴動はバラとラウタハットで起こった1971年の暴動で、これは数人のヒンドゥーが

ひとりのムスリムを、牛を殺したことを咎めて殺害したことがきっかけとなった。タライではこれらふたつのディストリクトでは2週間にわたって政情不安が続き、マイノリティーであるムスリムたちは極めて心細い状況に置かれていた。外国から帰国したマヘンドラ国王は武装した警官を動員して暴動を鎮圧した。ムスリムの保護のために国家機関を動員したことは、ヒンドゥーの君主と国家に対するネパリー・ムスリムたちの信頼を強めたようである。

フランスの人類学者Marc Gaborieauの意見によると、ネパールのムスリムたちは小さなマイノリティーであり、目立たないようにしているが故に守られているのだという。他方、社会学者で一時はパンチャーヤト体制下の大臣をも経験しているモハンマド・モーシンは、高地とカトマンズのムスリムたちがコミュニナルなものに動機づけられた事件に即座に反応せず、国家機関を信頼する傾向にあるために、全体としての雰囲気がさほど緊張していないだと感じている。

さらに、ネパールはこれまで一度もムスリムの支配下に置かれていないため、ヒンドゥーの圧倒的多数がイスラム教に対して大きな敵対心を抱いていないとも言えるだろう。そして、ネパールは、亜大陸のかなりの地域を巻き込んだ宗教に基づく分離の後遺症を経験しなかった。13世紀に、ギャスウッディン・トゥグラックがシンムローンガダを襲ったり、サムッディンがカトマンズの諸王国を略奪したりしたことや、ラージプートとラーーマンがガンジス平野から中央高地まで逃げてきたことと関係して、長いあいだ目を覚まさずにいる敵意が若干の者のあいだには存在しているかもしれないが、現在のコミュニティー間関係を左右するほど近い過去の歴史的経験は彼らにはない。

1992年12月6日のアヨーディアにおけるバブリ・マスジッド破壊事件後まもなく、東ネパールでロード・クリシュナの偶像がひとりの男によって破壊されたことが報告された。周囲が緊張に包まれた後、彼が子供の死を前に取り乱したヒンドゥーであってムスリムではないことが判明し、人々は胸を撫で下ろした。

ヒンドゥーとムスリムの関係がアヨーディアによって影響されたとはいえ、この国ではインドやパキスタン、バングラデシュで見られたような暴力沙汰はなかった。カトマンズのイスラム青年組合の会長であるモハンマド・フセイン・サムは、「神のおかげでそういう暴力事件はネパールでは起こらなかった。宗教を政治

に利用しようとしてこなかった政治家のおかげだ」と述べている。

デモクラシーとイスラム教徒

ネパールに数あるマイノリティーのなかのひとつのコミュニティーとして、理論的にはともかく実際には、ムスリムをひとつのエスニック・グループと見ることも可能であろう。トリブバン大学の計量経済学者であるハミド・アンサリは「ネパールのムスリムはひとつの宗教的マイノリティーという観点からのみ捉えられるべきではない。彼らはこれまで国家に無視されてきたという点で、他の部族の人々と共通の面をいくつか持っているのだ。」と言う。複数政党制に基づく民主主義の到来で民族の主張が行われるようになっているにもかかわらず、彼らムスリムは、部族集団のように明確に自己主張せず、おとなしいままであった。若干の高地のエスニック・グループとタライのグループが、これまで国家が彼らに与えてきた役割に挑戦し始めたが、それにもかかわらず、ムスリムたちはなかなか声を上げなかつた。

多くの世俗に生きるムスリムたちは、彼らの国政レベルの代表者たちは自分たちの関心事を十分に主張して来なかつたと思っている。慎重なまでの低姿勢は、ひとつのマイノリティーが自然と身につけた内気さみたいなものを反映しているように思われる。つまり、指導者たちは、あまりにも耳喧しくロビー活動をすることは、政治問題を引き起こすだけだということをよく心得ているのだ。トリブバン大学の政治学教授S. M. ハビブラーなどは、この点に不満で、「ムスリムの政治指導者たちはコミュニティーの利益のために発言する勇気がないんだ」と言う。

ムスリムたちは、いくつかのタライのディストリクトではかなりの人口を占めているにもかかわらず、固まりとなって投票することがなく、したがって、政党からは票田として扱われていないという事実が、ムスリム・コミュニティーの団結を損なっているように思われる。ネパーイー・ムスリムは彼らの要求を明確に主張するための独自の政治綱領を持っていない。たとえば、ネパーイー・ムスリム・リーグもネパーイー・ジャミハ・イスラミアもないのだ。

複数政党制の民主主義が実現してからでさえも、ムスリムの選挙民たちは国政の中心を担う諸政党に投票してきた。そして、このことは会議派のシェイク・イドリスから共産党のサリム・アンサリそして国民民主党のミルジャ・ディルシャド・ベグまで、ムスリムの秀でた個性が政界の広範囲にまたがってポツリポツリとしか存在していないことからも明らかである。

ムスリムたちのなかには、民主主義への移行期、とりわけ政党指導者たちがイスラム式挨拶をするのをメディアで耳にしたときに、ムスリム・コミュニティーがもう少し尊重されるようになるだろうと思い込んだ者たちもいた。ムスリムの指導者たち、とくに、左翼の指導者たちはセキュラリズムの憲法を実現させようとロビー活動をしていた。しかし、1993年11月に明らかになった新憲法は、ネパールがヒンドゥー君主の下にあるヒンドゥー王国であり続けることを謳っていた。

幸福感が失われ、代わって魂の抛りどころを求めるようになって、多くの活動家たちがムスリムの福祉組織、たとえばイッテハドゥル・ムスリム委員会 (Ittehadul Muslimean Committee)、イクラ・モダル・アカデミー (Iqra Modal Academy)、イスラム青年組合 (Islamic Yuwa Sangh)、ネパール・ムスリム組合 (Nepal Muslim Sangh)、バジュメ・アダブ (Bajme Adab)、ムスリム奉仕委員会 (Muslim Sewa Samiti) などへ向かった。

しかし、「ヒンドゥー」から「セキュラー」へと装いを変えただけではたいしたことは実行できなかっただろうと思っている人びともいる。サリム・アンサリは次のように主張する。「ネパールは現実にはセキュラーです。」イスラム青年組織のサムは「僕たちはセキュラリズムの名において他の国々で何が起こっているかを見てきました。牛の屠殺を禁止しているからってどうだっていうんです？水牛が牛の代わりになっているじゃないですか。」と言う。教育あるムスリムたとのなかには、憲法上の既成事実をめぐって議論するよりも、現存の枠組みのなかでイスラムの伝統や慣習により合法性を持たせるべく努力すべきだと主張する声もある。

実際、ネパール当局が稳健派ムスリムの諸要求を実現するために採り得たであろう若干の措置というものもある。これは、将来、強健な過激派と交渉するよりはより好ましいものであっただろう。

ネパールの司法制度はすでに伝統的なムスリム婚を認めている。たとえば、父方のいとこ同士の婚姻がそうだ。認めていないのは、伝統的なムスリムの離婚である。婚姻に合法性を与えながら離婚を承認しないのは法的には筋の通らないことであり、解決されるべき法律上の変則であろう。政府に雇用されているムスリムたちは彼らの宗教上の祭日に休むことを権利としては認められておらず、臨時休暇から差し引かれている。ハッジュ（メッカへの巡礼）に応募するための手続きは、不必要に志願者たちを悩ませるようになっている。解決されるべき事柄はあれこれと残っている。

裂目と底流

異教徒を改宗させる宗教であるイスラム教は、国家が改宗を禁止するネパールで、矛盾した状況に身を置いている。国家の禁止令にもかかわらず、教会の信者を集め続けてきたキリスト教使節と異なり、ムスリム・コミュニティーは大筋において、この制約に従ってきた。

しかし、そこには別の種類の「改宗」が進行しつつある。そして、それはコミュニティー内部で生じているのだ。南アジアのどこかで学んだ、あるいは湾岸諸国を訪れたひとりのネパーイー・ムスリムがワッハーブ派のような極右セクトの影響を受けて、より「正しい」ムスリムに帰っていくという過程である。そして、彼は文化的に同化されたネパーイー・ムスリムたちを教化しようとする。同時に、非ネパール人聖職者がダワ、あるいは教義の普及のために招待される。

こういった活動は教義の外にいる人々に対しては行われない。が、若干のムスリム学者たちが恐れるのは、それがムスリムたちを国政の中心からさらに引き離すことになるのではないかということであり、そうなればそれは有害なものとなるであろうということである。モハンマド・モーシンは「このような活動の行き着く先は、ムスリム・コミュニティーがネパールの支配的文化と社会からより一層遠ざかることであろう」と述べている。

このような「新原理主義」的綱領を宣伝するのはイスラム青年組織やムスリム奉仕委員会のような組織であり、これらはその文献によると「イスラムの正しい

メッセージを伝達し」「イスラム的生活様式のために努力し」あるいは「コーランに従って個人的および集団としての人生を送る」ことを追求するものである。

イスラム青年組合のサム（チベット系）は「新原理主義」という用語に厳しく異議を唱える。彼は「イスラムの五柱を信じているひとりの人間を原理主義者と呼べますか？もし、呼べるならすべての実践的ムスリムは原理主義者じゃないですか？」と言う。〔5つの主要な教義とは次のようなものである。すなわち、神は唯一であり、マホメットが最後の預言者であること、ナマズ（日に5回の礼拝）を行うこと、ラマダン月には断食をすること、ザカート（喜捨）、そしてもしできるならハッジ（メッカ巡礼）に行くこと、である。〕

さらに、サムは「僕らはシャリーアの実践を唱えていません。僕らはただ、ムスリムの若者たちは麻薬に走るべきではなく世界の諸事に自分を見失わぬイスラムに拠り所を見付けねばならないと言っているだけです」と付け加える。

多くのムスリム組織、とりわけタライに拠点をもつ組織は、イスラムに拠り所を見いだすために豊かなムスリム諸国から資金を持ち帰っている。そして、まさにそのことが若干の人びとの憤りを買っているのである。カトマンズの都心にあるネパーリー・ジャマ・マスジッドの新しい堂々とした建造物が外国の資金で建てられたことはよく知られているが、誰もその資金源を洩らそうとはしない。ムスリムの活動家たちは、湾岸資本でお金を集めるために「ヒンドゥー・ネパール」に暮らすムスリムが厳しい状況に置かれているといったイメージを流布しがちであると言われている。さらに、これらの組織は不透明で、ウンマのために集められた資金に対する責任の所在が明らかではない。

もっともよく組織された最大規模のものであるイスラム青年組合のような組織は、宗教活動において、タライ・ムスリム、とりわけ地方の土地持ちエリートに影響を与えることができた。それらの組織が提供しなければならないものは、精神的満足の他に、ムスリム諸国へ留学するための奨学金や湾岸諸国での就職の機会である。これらのグループの活動は、高地およびカトマンズの非タライ・ムスリムのあいだではあまり成功しなかった。

「新原理主義者」たちには、高地およびカトマンズの文化的により同化傾向にあるムスリムに対するかなりの敵対心が見られる。実際、彼らの怒りの矛先は伝

統的にリベラルなカシミーリー・ムスリムに向けられている。カシミーリー・ムスリムは他のムスリムよりも高い教育を受け、はっきりと自分の意見を主張し、伝統的にもネパーリー・ムスリムの指導者であった。そのうえ、これらカトマンズのカシミーリー・ムスリムは、保守派が非イスラムだと非難しているスーフィズムを信奉している。

指導者の幾人かが世界的な戦闘的イスラムによって影響を受けているタライ・ムスリムのあいだでは原理主義への傾斜が強い。今日、湾岸資金で次々に武装化した新原理主義者たちはコミュニティーのスポーツマンとして立ち現われ、コミュニティー内で力を得つつあるように思われる。この傾向が勢いを得て多数派ヒンドゥーと少数派ムスリムの関係が冷え始めるであろうことは、十中八九確実であろう。伝統的リベラルと異なり、新原理主義者たちはより強靭で妥協に応じない。

「伝統的リベラル」と「新原理主義者」との裂け目ゆえに、カトマンズ都心にあるふたつのモスク、すなわちスンニ派イスラムの別々の宗派に従っているネパーリー・ジャマ・マスジッドとカシミーリー・タキアは、きっちりとふたつに分かれている。ジャマ・マスジッドはより厳格なデオバンド派を支持する強力な綱領を持ち続けていた。それはコーランを字句どおりに解釈してコミュニティー・メンバーの日常生活にそれを採用するというものである。カシミーリー・タキアはバレーリー派に従っており、ここではコーランはより自由な解釈を与えられ、アラーと人間との仲立ちとしてスーフィー導師の権威を認めるというものである。実践においてはバレーリー派は、地域の風習や慣例と折り合いをつけてやってゆく傾向にある。

対立と調和

ネパーリー・ムスリムのリーダーシップは、カトマンズのカシミーリーからタライの教育あるムスリムへと移りつつある。モハンマド・モーシンが言うように、カトマンズ・ムスリムが高地ムスリムとの深い繋がりのおかげで国家により忠誠心をもっているのに対して、伝統的に権力の中心と支配的パルバテ文化から遠く

離れたタライ・ムスリムは、ネパール・タライ地域の他のコミュニティーおよび近隣諸国よりも多くのムスリム人口に強い一体感を抱いている。

懸念すべきは、ネパールのヒンドゥー知識人たちが、より多くの政治的代表を求めるムスリムの要求が高まってくるときに、これに過剰に反応することであろう。彼らに反インド感情があるとはいえ、カトマンズの教育あるエリートの多くはインドのヒンドゥー・エリートと同じ釜の飯を食ってきた仲なのである。彼らのセルフ・アイデンティフィケーションはインドの学識、インドのメディアの熟読、同時代の南の意見、「ヒンドゥー王国」であるネパールに対する心の底にある誇りを基礎にする傾向にある。たとえば、BJP支持者たちが「唯一のヒンドゥー国家」を守るために積み上げ、作り出してきた賛美のなかに、多くの教育あるネパーリー・ヒンドゥーは心地よく座っている。ネパールにおけるパキスタンISIの関与が噂され、インドで表面的に捻じ曲げられた形で報道されて以来、カトマンズの教育あるヒンドゥーたちの一部は態度を硬化しつつあるように見受けられる。このことは、たとえばメディアの記事においても、また、カトマンズ知識人との行き当たりばったりの議論においても明らかである。イスラムについて問い合わせると、あるエンジニアはこう皮肉っぽく答えた。「偉大な宗教であることは間違ひありませんね。何しろ他人を殺すことを誇りとするんですから。」ある官僚に、少数派であるムスリムの要求の幾つかを認めるにはどうすればよいだろうかと問うと、「よろしい。彼等の要求を少しだけ認めるとしましょう。すると、彼らはもっと多くを要求してきますよ。インドで現実に起こっているのは、まさにこういったことなんです。状況と取り引きするBJPのやり方は正しいのです。」と答えた。

多くのヒンドゥーにとっては、イスラムはウルト・ダルマもしくは裏返しの宗教であって、その理論的支柱を認識しているものは数少ない。彼らは、儀式の方法の細部、とりわけ彼らには全く馴染みのない部分に驚く。ムスリムは、ヒンドゥーが正しいと思っていることと正反対のことをやっているように見えるのだ。たとえば、沐浴のときムスリムは足から順に洗って次第に顔へと移っていくのに対し、ヒンドゥーはその逆であるし、ヒンドゥーはプジャ（ヒンドゥーの祈り）のときに東を向くが、ムスリムはナマズのときメッカの方角、つまり西を向くの

だ。

知識人たちのあいだでは、イスラムに対する恐怖は西側のメディアおよび西側知識人たちの反イスラムという性癖によって強調されている。このような態度は、ハーバード大学の政治学教授であるサミュエル・ハンティングトンが出版した論文に要約される。すなわち、ソ連の崩壊後、西側が次に対決するものはイスラムである、というものだ。ハンティングトンは、イスラムの東の「血塗られた境界」はたぶんアヨーディア以後のインドだ、と語る。親英的なネパーリー・ヒンドゥーのあいだでは、故に、ますますイスラムは敵の宗教と見做され、原理主義とイコールであるかのように思われる。

しかし、ヒンドゥー、とりわけムスリムの伝統と文化をよく知っているヒンドゥーのあいだでは、ムスリムたちの要求に確實に耳を傾けようではないかという声もある。ネパーリー・ムスリムの研究をしてきた歴史家のラジェーシュ・ゴータマは「もし国家が穏健なムスリムの要求を、今、心に留めないならば、ムスリムのリーダーシップが穏健派から過激派の手に渡るところまで彼らを追い詰めることになるかもしれない。すでに、急進的ムスリムのある組織は、タライの一部、たとえばネパール・ガンジなどで力を持つつある。」と述べる。

ムスリムの主な要求は近代教育へのアクセスを広げ、国家機構により多くの代表を送ることである。他の分野では、ムスリム・コミュニティーの声はそれほど一致してはいない。父方のいとこ同士の結婚がすでに認められているのだから、イスラムの伝統的離婚も認められるべきだと主張する者もいれば、それは重要関心事ではなく、むしろ農村に住むムスリムたち、とりわけネパールのムスリム・コミュニティーの大半を占めるタライのムスリムたちの貧困を緩和することに重点が置かれるべきだと言う者もいる。

イドゥル・フィットウル、イドゥル・アッジャ、ジャマ・アウウダのようなイスラム教の祭りは国家の祝日にすべきだという者がいるかと思えば、その日はムスリムの被雇用者に休みを与えれば済むことだと主張する者もいる。もし、ムスリム知識人の一部が政府にマドラッサの補助金を出す必要があると考えるならば、補助金はマドラッサの自治を侵害するだけであろうと思うムスリム知識人層もある。コミュニティー内の意見の一致がなく、すべてのムスリムの利益を代表

する国家レベルの組織が存在しないとするならば、ネパールという国家がネパリー・ムスリムの主要な要求に耳を貸すようになることはないであろう。これは不幸なことだ。

カトマンズの教育ある層は国家に中道路線を歩ませるべきであろう。そうすれば、南アジアの他の地域に暗い影を投げかけているヒンドゥー・ムスリムの分離分割は、ネパールには結局のところもたらされない。エリートがヒンドゥー原理主義へ向かって揺れ動かないように注意しながら、ムスリムの稳健な要求と調整をつけることも中道路線のひとつである。

【解説】

This article deals with the Muslims in Nepal, who have been for a long time ignored from both the academic and the political viewpoints.

Until now, there have been only two books published concerning Muslims in Nepal. One is written by a Bangladeshi woman and the other by a graduate student of Jawaharlal Nehru University in India.⁽¹⁾ Though a small contribution compared with these two books, this article is worthy of mention because Sudhindra Sharma, the author, considers the Muslims in Nepal as an ethnic minority rather than a religious group.

Being a M. A. holder in sociology from Ateneo de Manila University, Sudhindra Sharma has done various field surveys as a research associate under several national and international organizations, and also published several articles concerning religion and development.

He discussed for the first time the Muslims of Nepal in the English edition of "Himal" magazine in 1994, which was followed by the actual communal riot in Nepalganj, a city in western Nepal, in December 1995. Then, Sharma published a sequel paper on the same theme in the Nepalese edition of "Himal" in October 1996.⁽²⁾ I have fully translated the first article whereas the second article is just summed up.

Nepal, the only Hindu Kingdom in the world, has not witnessed any

serious communal riots, only a very few minor cases. Basically, Hindus and Muslims in Nepal have been living together peacefully and harmoniously since the beginning of the 16th century.

According to Sharma, there are three reasons why Nepal has been able to avoid Hindu-Muslim conflicts.

- (1) Muslims have not intentionally focussed on their own problems so far.
- (2) Their population is very small and the educational level is low.
- (3) Unlike India, Nepal has never been ruled over by Muslims.

On the other hand, relations between Hindus and Muslims have been changing since the advent of democracy in 1990, which has resulted from a change of identity. Before 1990, inhabitants of the Terai area (southern part of Nepal) had a common feeling of hostility towards the hill people whichever religions they belong to, whether Hindu or Islam. In other words, the identity of Muslims was similar to that of the Terai people since most of the Muslims in Nepal live in Terai. Identity among Nepalese was, at that period, roughly divided into two categories, that is, Terai people and hill people. This is based on the geographical differences.

However after 1990, people from both the Tarai area and the hills, if they were Hindus, started sharing an identity as a Hindu as against a Muslim. In the background, there has been a general tendency of raised consciousness to the different religions and languages by various ethnic minorities, who are insisting on their distinct ethnic identities these days. At the same time, one can feel the growing influence of Vishwa Hindu Parishad (the World Hindu Federation based in India) and Rashtriya Swayansewak Sangha (National Volunteers Association) in the Terai plains of Nepal.

The literacy level of the Muslims in Nepal is low and their employment opportunities within Nepal are limited. Hence, many Muslims from Nepal go to the Arabian countries in search of jobs. As the Arabian

countries have adopted the policy of employing at least 25% of the foreign labourers from among the Muslims, the Nepalese Muslims have benefited. After returning back to Nepal with the money earned in Arabian countries, the Muslims can afford to buy the land even at an inflated price and this results in an antipathy from the surrounding Hindu populace.

After the demolition of Babri Mosque in India and the Shah Bano incident (a case of divorce in the supreme court, related to Islamic law), even the average Hindu in Nepal has tended to start disliking the Muslim community. Another reason for the negative feeling of Hindus toward Muslims is their suspicion in relation to the Muslims and their possible role in supporting the hiding of Kashmiri guerrillas in the name of religion. It is said that Muslims in Terai area are frequently interrogated by Indian authorities with the prejudice that they have committed crimes.

The inflow of Arabian money has led to the invasion of new sects of Muslims such as Wahabi and Kadiyani into Nepal and also, as a result, an extensive increase in their numbers. Recently, the Muslims in Nepal are arguing to what extent the government should grant them rights as a religious minority. For example, one important issue is whether to ask for the right to a special curriculum in education for the Muslim community or to accept the existing modern education system so as to make it easier to access to the mainstream of the national politics. Whatever the case may be, it is true that the Muslims who were not able to raise their voice till 1990 started becoming conscious of their own right as a minority after democracy.

- (1) "Muslims in Nepal", Shamima Siddika, Kathmandu, 1993.
"Religious Minorities in Nepal" , Mollica Dastider, Delhi, 1995.
- (2) "Bhaguna Maanasikutaama Chan Taraika Musalmaan", *Himal* (Nepali), Asaar-Asoj 2053.